

『 極小規模校 』

教職生活38年で8つの学校に勤務しましたが、いわゆる「僻地複式校」勤務が一度だけありました。海辺の市街地から5km程離れた山の中にある小学校です。当時、校舎は築15年くらいでまだ新しさが感じられました。木がふんだんに使われ吹き抜けのホールもあり、一見、学校というよりは、「青少年研修施設かな？」とってしまうくらい素敵な校舎でした。

私は、11月の半ばにこの学校に赴任しました。

赴任当時の児童数は7名（1年生1名、2年生2名、4年生1名、5年生2名、6年生1名）。学級編制は、1・2年の複式学級、4年単式学級、5・6年の複式学級。この学校に3年5か月勤務しましたが、「生まれて初めて！」をたくさん体験しました。

その1：複式の授業

「校長先生、高学年で、何か授業してもらえますか？」と、赴任早々に教務主任の先生に頼みました。「ちょっと待って。明日までに返答します」と待ってもらいました。「校長が授業を持つのか？」と疑問に思い調べてみましたが、小規模複式校では校長も授業を週に何時間か持っていることがわかりました。「だから、教務主任の先生は、当たり前のことのように言うて来たのだな」と納得。「じゃあ、私、理科をやります」と返答。

複式の授業を初めてやられた方はわかると思いますが、授業の出だして、すぐに一方の学年の子どもの指導に入ってしまう、もう一方の学年の子どもの自学のための指示を出すことを忘れがちになります（結果、その学年の子どもの活動ができない時間が生じます）。そんな初歩的なミスを何回か繰り返しながら、複式の授業の基本である「わたり」と「ずらし」に慣れ、「間接指導の際の自学」の重要性を学びました。

その2：花火の打ち上げ

児童数が10人に満たない学校でしたので、運動会は、“子どもvs親”というやり方で紅白対抗スタイルを成立させていました。そして、地域の方が参加する種目がたくさんありました。運動会は、午前で終了。その後、地域の方も交えての「昼食会」（ジギスカン）で、親睦を深めました。

さて、「運動会実施！」の合図として、早朝に花火を打ち上げていました。「花火の打ち上げ作業は誰がやるのですか？」とPTA会長さんに尋ねたところ、ややニヤニヤしながら「校長の仕事だよ」と即答。「それは危険では・・・」「なんも。簡単だよ。みんなやってたよ」「問題なし！大丈夫！」と、断る余地は全くありませんでした。

「やるしかない」と覚悟し、業者の方にやり方を教えてもらいました。「筒は、まっすぐ上に向けて固定。一番大事なことは、花火の玉を筒の底にちゃんと置くこと。二度ほど玉を上下に動かし、音で玉が底に当たっていることを確かめること。玉と筒底に隙間があると、玉が上には飛ばずに筒の底へ逆行し筒内で爆発しちゃうからね。最後に、この2本の導線の先を乾電池の両端につなげると打ち上げ終了」怖がり屋の私は、その説明を聞いて、すっかりビビってしまいました。「下手をしたら、爆発事故でしょ」と。

当日は、時折霧雨模様でしたが、PTA会長さんが「大丈夫。やろう」ということで運動会実施の判断をしました。「では、花火を打ち上げます」と言い、校舎裏の畑の隅で準備を始めまし

た。筒の固定のため角材を地面に打ち込み、それに筒を縛りつけました。筒の向きを確認し、次に花火の玉を筒内に挿入。筒底にちゃんとあることを音で確かめた後、巻いてあった導線をほどき5m程筒から離れました。後は、2本の導線の先端（被膜が取れている部分）を乾電池に接触させるだけです。「ちゃんと上がってくれよ」と祈りつつ、まずは乾電池のマイナス極に、そして「行け！」と、力を込めてプラス極に接触させました。と同時に「バシュッ！」という音がし花火が打ち上がりました（「一瞬」とは、まさにこういうことか」と妙に感心しました）。「バン、バン、バン」と花火が力強く鳴りました。その時思いました。「私が打ち上げた花火だ。その花火が、運動会の実施を知らせているのだ」と。そして、「よーし。やるぞ！」と、大いに気合いが入りました。

その3：刈払機・除雪機

校舎周辺は緑がふんだんにあるので、草刈りは大変でした。公務補さん（午前中のみの勤務）はいましたが、諸事情により私も除草作業をやることになりました。

恥ずかしながら、これまで刈払機を使つての除草をしたことがありませんでした。ここでもまた、怖がり屋の私は、「回転する刃が、はずれて飛んできたらどうしよう」と、作業をする前はビビっていましたが、すぐに快感に変わりました。伸びた草が面白いように刈られ、スッキリしたスペースが見る見る広がっていったのです。やった成果がすぐ見える喜びを味わいました。

雪の多い地域でしたが、除雪機による除雪も除草作業と同様の喜びを味わいました。加えて、除雪機ならではの面白さを感じました。それは、巻き込んだ雪を放出する際、ノズルの向きを上下左右に調整するのですが、思い通りの方向に雪を放出できることが、半ば快感になっていました（ちょっと子供じみていますが）。

その4：子ども会事務局

小さな地域でしたが、素晴らしい活動をしている子ども会がありました。ただ、子ども会事務局の仕事が、学校の業務として位置付けられていました。担当していた先生は、このことに不満を持っていました（私が赴任した時にはすでに決まっていたことなのですが）。毎年1月上旬に総会が行われます。その先生は、「総会の資料は作りました。後はお願いします」と事務局の仕事の返上を申し出ました（12月の下旬頃）。「確かに校務への位置づけは筋違い」と私も思いましたが、これまでの経緯から、職員の誰かが担当しなければならない状況がありました。「だったら、学校の職員としてではなく、地域住民の一人として、私がやります」ということで、それ以降3年程、子ども会の事務局をやりました。

主な活動は、春と秋の資源回収（終了後の昼食会が本格的でおいしい！）。夏の小旅行と冬の餅つき会。一番印象深かったのは、夏に行った劇団四季の「ライオンキング」観賞ツアー。札幌日帰りのかなりハードな行程でした。会長さん（保護者です）と打ち合わせし、役割を分担して準備を進めました。当日の私の役割は、添乗員役。安全かつ楽しいツアーになるよう頑張りました。帰りのバス中では、子ども達は大興奮状態。「ライオンキング」の話で大盛り上がり。その喜ぶ様子を見て、「やってよかった」と私も充実感を味わっていました。

その他、鶏解体作業、落ち葉を集めて焼きイモ作り、学校畑で作った野菜等を活用した収穫祭（保護者や日頃お世話になっている地域の方々を招いての食事会）、地域合唱団の指揮者、巨大かまくらづくり、冬の星空に濃く横たわる天の川の見事さ（半端ないレベルです）等々。

「俺達が協力したら、できないことはない！」と、PTA会長さんは言っていました。本当にその通りでした。PTA副会長さんは、「校長先生、五分で行きましょう」と言われました。子どもの教育への責任と覚悟を持っておられました。今思うと、この学校と保護者や地域の方との間にはパートナーのような関係があったように思います。時折、懐かしく思い返しています。